

2011年4月26日／浪宏友ビジネス縁起観塾

自分の本質

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「信解品」

1. 信解品の概要

釈迦牟尼世尊の大弟子四人（慧命須菩提・摩訶迦旃延・摩訶迦葉・摩訶目犍連）が、妙法蓮華の教えの真意を理解したことを、長者窮子の譬えによって発表します。

2. 長者窮子の譬え（『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 58～60）

(1) 放浪の身となる

幼いときに父の家からさまよいいで、放浪の身となった男がありました。五十歳にもなるまで他国をさすらい、貧しい暮らしをつづけていましたが、しかし、老いの影がしのびよるにつれて、足は不思議にも父のいる場所に向かっていくのでした。

(2) 子を探す父

父のほうでは、ひとり子を失ってたいへんに悲しみ、方々探しあてましたが、どうしてもみつかりません。しかたなく、ある町に住みついでいました。かぞえきれないほどの財産をもち、りっぱな邸宅に住んでいました。

(3) 父の屋敷の前に行く

息子は、さすらいの果てに、たまたまその町へやってきて、父のやしきの前をとおりかかったのです。なにか仕事をさせてもらえないものかと、なかをうかがえば、国王かとも見えるりっぱなお方が、おおぜいの召使いにかしずかれていて、あたりの様子もたいそうおごそかです。

その男は、なんとなくおそろしくなってきました。—— とても自分などがやとってもらえる家ではない。まごまごしていると、つかまえられて無理やりはたらかされかねない、やはり自分はここには向いていない—— そう考えて、急ぎ足に立ち去ろうとしました。

(4) ひと目で我が子とわかる

一方、父の長者としては、かたときも忘れたことのないおもかげです。門前にたたずむみすぼらしい男がまさしく自分の子であることが、ひと目でわかりました。さっそく召使いに命じて、つれてこさせようと思いました。ところが、親の心を知ろうはずもない窮子は、殺されるのではないかという恐怖感から、召使いの手をふりきろうともがいたあげく、気を失ってしまいました。

そのありさまを見ていた父は、むりにつれてくるのをやめさせました。

(5) だんだんに導く

そして、しばらく日がたってから、窮子のところへ、みすぼらしいなりをしたふたりの召使いをやり、「汚いものを掃除する仕事だが、賃金はふつうの倍もらえる口があるが、どうだ」と誘いをかけさせ、やしきのなかへ引き入れることに成功しました。長者は、自分も汚い姿となって子の警戒心を解きながら、そばに近づき、やさしいことばや励ましのことばをかけてあげ、ついに仮の子ということにしてみました。

(6) いやしい身の上だという意識

窮子のほうは、その待遇をうれしくはおもうのですが、自分にはふさわしくないという気持ちはいつまでも抜けません。父は、やがていろいろな仕事をさせるようにし、ついには全財産を管理する支配人にとりたてました。窮子は忠実にはたらき、りっぱにその役を果たすのですが、それでもまだ自分はいやしい身の上だという意識は捨てきれなかったのです。

(7) 親子の名乗り

そうしているうちに、窮子の卑屈な心もしだいにうすれてきました。そこで、自分の死期の近づいたのを知った父は、国王をはじめ町のおもだった人びとを集め、「この男こそわたしの実子です。わたしの全財産はこの子のものです」と発表しました。

窮子は、そのときはじめて、この大長者がほんとうの自分の父であったことを知り、父の無限の財産がそのまま自分のものであることがわかり、かぎりない喜びにひたるのでありました。

(庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 58～60)

3. 譬えの意味

(1) 大長者

大長者は、仏さまです。

大長者は、息子に財産を譲ろうと、苦心惨憺します。

仏さまは、私たちが仏の境地に導くために、人に応じ、場合に応じて適切な教えを説き続けてくださいます。

(2) 窮子

窮子は、自分から屋敷をでます。

窮子は私たちのすがたです。私たちは、自分が仏の子であることを自覚しないために、真理に背を向けて苦の世界にさまよい出てしまったのです。

真理に生かされているという根本的な事実気づかないために、自分・他人・世間を生かすという自分の本来の生き方をすることができず、自分本位の生活を続けて憂悲苦悩の人生を送ってしまうのです。

(3) 門の前に立つ

窮子はしらすらうちに父のやしきの門の前に立ちました。

自分が仏の子であることを自覚していなくても、いつしか仏のいるほうに近づいていく衆生の心を表しています。

私たちの本質は仏性ですから、自分本位の欲望に生きていても、心のどこかで、真理を求める思いが動いているのです。

(4) すぐにわが子だと分かる

大長者は門の前に立った窮子がわが子であるとすぐに分かったけれど、窮子のほうでは分かりませんでした。

私たちはいつでも真理に生かされて生きているのに、私たちの方では真理に気づかないことを表しています。

(5) 窮子が気を失う

召使いにつかまえられて、やしきに連れて行かれようとした窮子が気を失ってしまいました。

自分本位の欲望に生きている人に対して、いきなり自分本位の欲望を捨てて、真理に生きなさいと導いても、無理であることを表しています。

(6) 汚いところを掃除する仕事

長者は窮子に、まず汚いところを掃除する仕事を与えました。

汚いところを掃除する仕事とは、自分の心の迷いを取り除く修業です。

目先の小さな迷いを取り除く修業から始まって、だんだんに心の奥深くに潜む根本的な迷いを取り除く修業に進みます。だんだんに高度な仕事を与えたというのは、そのことを表しています。

高度な悟りに到るには、足元の一步一步を踏みしめて、一段ずつ悟りを深めていくほかありません。

(7) 支配人に取り立てる

窮子がついに支配人に取り立てられました。支配人は財産を管理するはかりでなく、ときには主人の代理を務める立場です。

修行を重ねることによって境地が上がり、教えをマスターし、ときには仏さまに代わって人々に教えを説くこともできるようになったことを表しています。

(8) 意識が上がらない

窮子は、自分はいやしい身の上だという意識をなかなか捨てきれませんでした。

私たちは、仏の子だ、仏性があると教えられ、頭でわかっても、実感するくらい芯から分かることはなかなかできないものです。

(9) 全財産をゆずる

自分はいやしい身の上だという心がなくなったとき、長者は、息子に全財産を譲りました。

自分の仏性に目覚めて、修業次第で自分も仏の境地にいたることができるのだと、はっきりと理解し自覚できれば、仏の悟りに向かって、まっすぐ修業できるようになります。

仏の智慧という全財産を、まるまる受け取るには、これから先の修業が鍵となるでしょう。

4. 長者窮子の譬えが言いたいこと

(1) 自己の本質の尊さを知れ

「このたとえ話に教えられた精神を一言でいえば、“自分は迷った人間だ、罪の子だなどという卑屈な考えを捨てて、仏の子であるという真実にめざめよ”ということです。すなわち、“自己の本質の尊厳さを発見せよ”ということです。」（『法華三部経 各品のあらましと要点』p. 65）

(2) 自分で限界をつくるな

- ① 四人の大声聞たちは、自分が真理に生きられるようになったことで満足してしまい、さらなる向上への意欲を起こしていませんでした。自分で自分の限界をつくっていたのです。
- ② 妙法蓮華の教えを聞いた大声聞たちは、自分の本質の尊さを悟り、再び、向上への道を歩み始めました。自分でつくっていた限界を取り払うことができたのです。
- ③ 私たちは仏の境地にまで高まり、自・他・世間を共に生かすはたらきをすることができるようになれるのです。低い段階に止まって、自分はこの程度でいいとか、ここが自分の限界だなどと断言してはいけません。

「自分で限界をつくるな」と、長者窮子の譬えは語っているように思われます。

5. 自己の本質の尊さが分かるとどうなるか

(1) 救い

「そういう自覚（筆者註：自己の本質の尊さが分かること）ができますと、あまりみっともないことはできなくなります。たとえ煩惱はもとのように起こっても、それにふりまわされて失敗したり、苦しんだりすることはなくなります。欲望はまえと同様に起こっても、自然とそれをいい方向に向けて使うようになります。それだけでも、たいへんな救いなのです。」（同、p. 65）

(2) 煩惱に善い方向を与える

- ① 煩惱そのままに自分本位の行動を行えば、真理から外れて〈悪〉となります。
- ② 煩惱に善い方向を与え、真理に合ったことを行えば〈善〉になります。
- ③ 煩惱に善い方向を与えるとは、たとえば「願いを満たすためには善いことを行えばよい」というようなことです。
- ④ 自己の本質の尊さが分かると、自然に、自分の煩惱に善い方向を与えるようになるのです。

6. 「信」と「解」

(1) 「解」

「解」とは、理解することです。りくつから推して行って「なるほどそうだ」と頭のなかで割りきることです。

ものごとの「原因・条件・結果・影響の関係」が理解できることと言っていいでしょう。

(2) 「信」

① 「解」から生まれる「信」

信解品の「信」は、理解がすっかり心に定着して少しも疑わなくなった状態です。

② 直感的な「信」

ものごとを直感的に「そうだ、そのとおりだ」と思って、そのまま心に定着し、少しも疑わなくなることがあります。これも「信」です。

7. 「信の対象」と「信」

(1) 掛け算

- | | | | | |
|----------------|---|--------|---|-------------|
| ① 「信の対象が正しい」 | × | 「信が深い」 | = | 正しく大きな力になる |
| ② 「信の対象が正しい」 | × | 「信が浅い」 | = | 正しいが力は小さい |
| ③ 「信の対象が誤っている」 | × | 「信が深い」 | = | 誤った大きな力になる |
| ④ 「信の対象が誤っている」 | × | 「信が浅い」 | = | 誤っているが力は小さい |

(2) 信の対象を見極める

- ① この掛け算から分かることは、“「信の対象」が正しいかどうかを見極める”ことが、もっとも重要だということです。
- ② 信の対象が正しいかどうかを見極めるのは理性のはたらきです。これが「解」です。
- ③ 次元が高く澄みきった理性を持っていれば、信の対象を理解し、正しいかどうかを見極めることができます。
- ④ 心が清らかで曇りがたい人は、信の対象が正しいかどうかを、直感的に感じ取ることができます。この場合、本当に正しいかどうかを、理性で確かめなければなりません。

8. 釈迦牟尼世尊の態度

釈迦牟尼世尊は弟子たちに向かって、釈迦牟尼世尊の説法を聞いたら、よく考えて理解し、納得がいったら実践し、確かめなさいとおっしゃいます。

「鵜呑みにせよ」とか、「疑ってはならない」などとはおっしゃいません。